July 1, 2011
第 6 号

NEWSLETTER

大阪女学院大学　大阪女学院短期大学

教員養成センター

●巻頭エッセイ Crisis in Japan, Crisis in Commuication.....1
●勉強会「英語の教え方教室」報告.....2
・第８回勉強会.....2
・第９回勉強会.....3
●授業の玉手箱　「ことばは生きている」.....4
●書籍紹介　『金ソンセンニム―済州島を愛し、民族教育に生きた在日一世』.....4
●編集後記・第 10 回勉強会案内.....4

巻頭エッセイ

Crisis in Japan, Crisis in Communication

東條　加寿子

大震災から３カ月、未曾有の災害は容赦なく日本に試練を与えています。福島原発の放射能漏れの問題は未だ収束の道筋さえ見えず、脱原発を宣言したドイツ、国民投票で原発の是非を問うたイタリアなど、世界規模で次世代のエネルギーをめぐって議論が高まっています。21 世紀初頭、私たちに迫られている原発依存（推進）・脱原発の選択は、農業革命、産業革命、IT革命に並ぶ人類にとって第4の革命、エネルギー革命をもたらすとも言われています。さて、ここでは危機の中で顕在化した日本人のコミュニケーションの問題を考えてみたいと思います。

大震災から２週間が経つ３月 24 日、米国ワシントン DC の American University であるシンポジウム（注1）が開催されました。タイトルは Japan: Crisis in Communication。これは同大学 School of Communication が主催したもので、パネリストとして折しも滞米中の NHK 記者と日本人大学研究者、及び２人の同大教授が参加しました。議論はもっぱら、日本政府と関係当局・関係企業がなぜ放射能漏れについて客観的なデータを適正に開示しないのか、情報操作（controlled message）や情報隠ぺい（withholding information）が行われているのではないか、日本人ジャーナリストや国民はなぜこのような状況に甘んじているのかということに終始しました。そしてシンポジウムでは、日本のニュース報道は役に立たない（not useful）、危機管理下での日本政府のコミュニケーションは機能不全に陥っている（a communication breakdown）との論調が支配的でした。もっとも、これらのニュース報道や発表はもともと日本国内向けのものであり、日本では危機に際して社会秩序の維持が最優先することを勘案すれば、日本におけるメディアの役割は、例えばアメリカにおけるメディアの役割とは本来的に大きく異なるとの文化的考察も示されました。

現に、原発事故に関する日本政府からの情報発信は世界の信頼を失い、私のアメリカ人友人によれば、事故から２週間経ったその頃、アメリカ政府はアメリカ国籍の日本滞在者に対して独自の避難勧告を発信したということです。

放射能漏れという深刻な危機の中で、私たち日本人も、政府、関係当局及び関係企業による情報開示の遅れ、情報の二転三転について不信感を持ちました。また、情報の伝わり方についても大きな不安を感じざるを得ませんでした。日本語・日本文化の特徴として「不安をあおるような」「パニックを引き起こすような」伝え方に対する配慮からでしょうが、婉曲表現が多用され、結局どのような状況なのかを理解できない状況が続いていています。「ただちに～ない」は安全表現でしょうか、危険表現でしょうか。特に、災害や危機に際しては「わかりやすく説明できるコミュニケーションの専門家が必要だが、こうした人材がいない」（産経新聞４月 20 日）ことを、私たちは今回身をもって体験しています。ここに日本人のコミュニケーション・スタイルの問題点があります。そして、この日本式コミュニケーション・スタイルは世界で通用しないことが、今回はっきりとわかったと言えます。

さて、日本人にとって英語は長い間、外国の情報を日本が得る一つの手段であったと言えるでしょう。外国の書物を読み、外国の人に耳を傾け、英語を通して日本は多くの知識を吸収してきました。やがて人々の流動性が高まり、日本人が海外に出て行くようになって、英語で積極的に自己表現することが必要になってきました。そこで、英語によるコミュニケーション能力や意思疎通を図ろうとする積極的な態度が求められるようになったことは言うまでもありません。そして今回、震災や原発事故に関する日本発の英語情報が圧倒的に不足していると批判されていますが、裏を返せば、世界が日本からの情報発信を強く求めていると言えるでしょう。

このように、グローバル化した現在、日本人にとっての英語は確実にその意味合いが深化しています。そして、日本人のコミュニケーションの問題は、今や日本だけの問題に留まらず世界が注視していることを、奇しくも今回の大災害が教えています。

おわりに、英語は言葉。言葉は希望を紡ぐことができます。復興への祈りに代えて、英語でどのように希望を結ぶことができるのかをみなさんと一緒に考えてみたいと思います。

****

（注1）
American University が制作し Web 上で公開している LINK TV のプログラムとして以下のサイトで見ることができる。
http://www.linktv.org/programs/japan-crisis-in-communication-panel

特　集

教員養成センター　勉強会「英語の教え方教室」

― みんなで話し合ってみませんか　英語授業でのちょっとした工夫を ―

報告：中井　弘一

第８回勉強会　　５月 21 日（土）

本年度最初の勉強会（第8回）を５月 21 日に開催した。中学・高校現職の先生が発表者あわせて 14 名、本学の学生が７名、教員養成センター担当教員が２名の合計 21 名と、at home な勉強会をめざしている中で充実した参加者数であった。はじめて来ていただいた先生方も多く、これからの勉強会開催にさらなる責任を感じた。

■「元気がでる・やる気がでる英語授業」実践報告

枚方市立第２中学校　岡　順二　教諭

元気溢れる授業の様子を話していただいた。岡先生の授業の特徴は、❶生徒の活動を多くする ❷スピーディーに行う ❸継続して行う ❹生徒に暇を与えない ❺様々な活動を用意する ❻音読は中学生の英語学習の要（学びのウオームアップ） ❼目標・ハードルを高くして、チャレンジさせ、その達成感を持たせるという先生の指導理念に基づく、一途さと工夫にある。説明のあと、岡先生の指示に従い、通訳シートを使って音読ペア活動、サイトトランスレーション活動などを参加者全員で実際に体験した。このような熱意と工夫ある授業には中学生は必死に頑張るだろうと、その体験と通して感じた。

英語をスキル科目として、さながら体育の授業展開のように、音読というウオームアップで準備運動をし、いくつかのプロセスに分けた活動ごとに教師が簡単な説明や模範を見せ、それを生徒がペアやグループで活動しながらその技術を習得していく流れである。一つの段階の活動が終われば次の段階へと移る。教師は各ペアやグループに寄り添い適宜アドバイスする。実技科目として１時間を構成し、生徒が活動しやすい補助（資料）を事前に周到に準備をして行う授業であった。

また、生徒の自己紹介スピーチ映像を見せていただいたが、生徒の原稿が教材提示器で背後に映し出され、スピーチを聞いている生徒は音声を文字で確認できるように工夫されていた。イラストなどが入った自己紹介原稿カードはそれ自体も楽しく、また、英語の聞き取りが苦手な生徒にも文字情報が背後に映し出されることによって理解が容易になり参加度が増すように思えた。それも一つの工夫であった。

さらに、音読への挑戦は、高校の教科書にも出ているリオの環境サミットでのセヴァン・スズキの伝説のスピーチ（Hope for the future）を中学１年生後半にすべて暗唱させるという活動に発展する。園児・児童が宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」を暗唱することがあるが、メッセージ性のあるスピーチを適度に意味がわかって覚えることは中学生にとっても快感なのかもしれない。ハードルを高くして挑戦させるが岡先生のモットーである。目標設定理論から言えば、高い目標と明確な目標はやる気を生む。１年生の三学期には、教科書を最初から最後まで音読することがあり、すべてを読み切るのに 15 分とかからないとのことであった。確かに習い終わった教科書を 15 分以内で音読できれば、その学習に対しての達成感は生まれるだろう。体当たりで生徒に向かっておられる先生の姿勢に敬意を表したい。

資料概要

授業のコンセプト

＊入試に対応する英語力（家庭からの信頼）
子どもたちは塾へ通う場合が多い。書くこと、読むことにも重点を多き、塾を超える授業をめざしている。入試の分析を行い、スキルをつけることも念頭に置いている

＊自分が楽しい授業（時間が早く過ぎる授業）
自分が楽しくないと、子どもたちはその何倍も苦しんでいる

＊生徒が主体：クラス 32 人が一斉に音読、ペア活動

＊ペア・ワーク活動：音読を中心に

＊音読→暗唱→暗写の徹底、そこから自己表現へ
徹底した読みの練習、音読のバリエーションを考える

＊メリハリがあり、パーツを多く
一活動 10 ー 15 分とする：生徒に暇を与えない活動の種類と量

授業の進め方

〇ウオームアップ

＊いきなり音読

＊ラストセンテンス・ディクテーション

＊リスニング（3 分・週 2 回程度）

〇イン・クラス

＊簡単な英語を使って、教科書の題材に触れる。質問をする

＊ New Word の質問（宿題とはしていない）
4 分間で巻末の glossary で調べさせる　→　発音練習

＊ Target Sentence の確認

＊通訳シートで内容の確認　→　英語で意味チェック

＊音読（発音・音の脱落・つながりを意識させる）

＊未来予想図で練習問題

＊単語習熟プリント

通訳シート一部
（音読・同時通訳等に活用）

見えたこと

自己表現に子どもは意欲的に取り組む。英語を使って人と関わることで、子供たちの心が育っていく。ハードルを上げることで、子どもはより意欲的になる。教師ができないと思った時点で子どもの可能性を摘んでいる。達成感が自信を生み出し、それが力となる。一斉授業をしつつも、子どもたちと個別に関わりを持つことが大切である。

未来予想図
（文法学習）

自己紹介ポスター

コの字型座席授業（学習環境）

■「明日からの授業実践のために　ー英語授業の哲学ー」

大阪女学院大学　中井　弘一

授業を高めるためには、生徒に好かれ、信頼され、尊敬される人格的力量を高めることが何より必要で、そのためには、①教育に対する信念と情熱を持つこと ②物の見方を広げること ③夢を語ること ④英語学習の目標・景色を見せるという心構えが大切である。

また、自律的な学習者育成の観点から、「内在的な興味を持たせる」ことと「自信を持たせる」ことが必要で、そのためには、「英語は面白い」と思わせること、自信はやりとりを通して生まれるのでやりとりを大切にすることなど、以下のポイントについて話した。

(1) コミュニケーションとしての英語の特質を説明できる
(2) コミュニケーションとしての英文法を生徒が納得できるよう説明できる
(3) コミュニケーションとは何か体感させ、コミュニケーションの本質的な機能を理解させることができる
(4) 発問（やりとり）を通して、授業での思考を促すコミュニケーションを活性化できる
(5) 思考力がコミュニケーション能力を育成すること理解させることができる
(6) 英語指導技術の前に生徒との豊かな授業コミュニケーションを行うことができる

第 9 回勉強会　特別講演　　6 月 18 日（土）

今回は大阪府教育センターの蛭田勲先生に日々の授業に力強く取り組める元気を与える教育実践を紹介していただいた。勉強会に今回はじめて参加された先生も数名おられ、「at home な雰囲気でありながら、非常に内容の濃いお話であった」と皆さんから充実した勉強会との感想をいただいた。蛭田先生には心よりお礼申しあげたい。

■「授業改善に向け他校種に学ぶ　ー豊かな心をはぐくむ外国語教育ー」

大阪府教育センター　カリキュラム研究室長　　蛭田　　勲

何よりも、蛭田先生のエネルギッシュな話に、参加者はみな感動した。日々の授業に力強く取り組める元気が出る授業の指導をお話しくださいとお願いしていたが、言葉で説明するだけでなく、講演姿勢そのものが、参加者一同に「元気」を送り続けるものであった。

最初に、ベネッセ教育研究開発センターが 2004 年・2009 年の調査をまとめた高校生の実態から、「家族との関係」、「友達・先生との関係」など対人関係に満足している高校生の率は非常に高いが、「現在の自分の成績」「自分の性格」など自分に対する満足度はかなり低いことを指摘された。このことが将来の自分像として「人の役に立ちたい」「世界で活躍している」にかなり低い自己想定感を抱いていることにつながっているのではないか。今の高校生の自分に対する自信のなさがうかがえると話され、そしてそれが一例として、平成 18 年度大阪府学力等実態調査での一設問、my dreams についての 4 行程度の英作文問題に対する解答においても 42％という無答率の高さに跳ね返っているのではないかという分析をされた。結果として見えることは、学力の重要な要素である学習意欲や粘り強く課題に取り組む態度に個人差が広がっていることである。学習意欲の低下により課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力が十分育成されず、結果として生徒の学力を高めるために必要な「成功体験」が生徒に生み出されないという現状が大きな教育課題であるとの指摘であった。

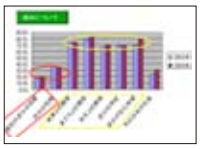
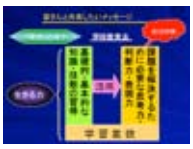
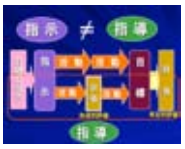
また、ラーニング・ピラミッドを提示され、学習が定着するには、「知識」の提示に終わる講義形式でなく、「心を動かす体験」、そして学んだことを人に伝える「言葉の力を持つ」ことが何より大切であるとされた。蛭田先生の「魅力ある授業」への提言は、①「こころ」が動く授業、②「ことばの力」が育つ授業、③「成長」が実感できる授業の三項目に集約される。

そして、中学校・高校では、この「こころ」を打つ授業、「成功体験」与える授業が残念ながら少ないのではないかと話された。その点、小学校の先生の授業は、たとえ小さくても「成功感」を少しでも多く持たせようとされる工夫と献身的な取り組みがうかがえる。何度も参観に行った多くの小学校の授業を見て、涙が出るほど「感動を覚える授業」、「こころを揺さぶられる授業」が数多くあった。中学校・高校の教員はその姿勢から学ぶべきものがあると、ご自身の参観体験から強く主張された。心を育てることばの授業こそが命であるということだろう。そこで、単調なことを楽しく考えて活動させる小学校の先生の工夫のいくつかを参加者に体験させるように紹介された。

少し休憩時間を挟んで、千早赤阪小学校の外国語活動と吹田市の中学校 2 年生の英語の授業をビデオで見せていただいた。児童・生徒は生き生きと反応していた。音声練習から音読を踏まえた上での内容理解・文法理解の順序性と「共感（empathy）」をともなう褒めことばなどをキーポイントとして指摘された。

最後に、高校教科書（New World English Course II、三友社）に掲載されている "From Bruce Springsteen's Live" の実際のライブ録音を聴かせていただき、本文の最後の行に入る言葉は何かを生徒に考えさせ埋めさせる活動を紹介された。それは蛭田先生がある高校でのご自身の最後の授業で行われた活動であり、生徒に人間のことば（表現）の持つ意味の重みを考えさせたという感動的な話であった。締めくくりに、ウイリアム・ウオードの「平凡な教師は言って聞かせる。良い教師は説明する。優秀な教師はやってみせる。しかし、最高の教師は子どもの心に火をつける」ということばを引用されて講演を終えられた。

資料をたくさん用意され（実は 3 時間では足りない量の ppt 資料があり、割愛されたものがある）、非常に真摯に、懸命に話してくださる蛭田先生の話に、参加者一同感動だけでなく元気をいただいた。"That's good." と参加者の皆さんは帰り道で思われたことであろう。

ppt 資料の一部
（101 枚のスライドを用意していただいていた）

授業の玉手箱

ことばは生きている

夫　明美

授業を運営するにあたり、先生方は多くの時間とエネルギーを教材研究に割かれていると思われます。生徒・学生の興味や関心を引くために教科書で扱われているトピックをどのように導入するかは、その後の授業展開のカギを握る重要なポイントでしょう。本稿では 2007 年発行の New Crown [1] の4章「Pūnana Leo（直訳すると『声の巣』）に関連して、ハワイで行われている言語保持活動について紹介したいと思います。

当該箇所ではハワイ出身のALT教師 Kalei Kealoha 氏が自分の出身地であるハワイについて紹介しています。地理的な位置や民族構成の紹介に続いて、英語の占める社会的な役割と位置づけ、そしてハワイ州ではもう一つの公用語と制定されている「ハワイ語」へと話は展開していきます。1970 年代に盛んになった「Pūnana Leo」の活動内容が紹介されて、言語が歴史や文化を映す鏡であること、人間のアイデンティティであることについて考えさせます。日本では「みなが日本語を話す」ことが当たり前のように思われているので、言語が危機に瀕することや言語が滅んでいくことについてテキストと関連付けて話すことは新たな学習になると同時に、環境保護などと同様にグローバル社会に伴う変化についても考える契機となると思われます。

私は 2011 年 2 月にハワイ大学マノア校（オアフ島）で開催された International Conference on Language Documentation and Conservation という学会に参加しました。その学会のプログラムの一部で、ハワイ大学ヒロ校（ハワイ）がホストとなり、同じハワイ島にある Nāwahīokalaniōpūu という幼稚園から高校までハワイ語のイマージョン教育を行っている学校を見学する機会を得ました。授業見学では、小学校低学年の子どもたちが私たちにゲストにも分かるレベルのハワイ語で「自分の名前・自分の住んでいる場所」をハワイ語で自己紹介してくれました。中学生の授業ではハワイ語でアメリカ文学史のイントロレベルを学んでいました。

写真①イム：非常に大きく、大人数分の料理にも対応

写真②豚小屋「豚に触ったり餌を与えないでください」と表示

授業外で特に印象的だったのは、校舎の裏手に大きな庭園、農場、イム（ハワイ式の大きな囲炉裏：写真①）、豚小屋（写真②）があったことです。管理責任者の方、同校出身のホスト大学生の案内によれば、この学校では言葉を教育するだけでなく、昔のハワイ人たちの生活様式やそこに投影される社会文化的な価値観も教育を通して受け継いでいくことを大事にしているということでした。日本での「いのちの教育」ではありませんが、年に 1 度は飼育した豚をさばいたのち、イムで料理し、ハワイ式のパーティ「ルアウ」も開催されるとのことです。「言語は話者や民族のアイデンティティだと認識し、尊重すること」や「ことばにこめられている社会文化的な価値観を世代を超えてどのように継承していくか」は、言語が言語として生き抜いていくために非常に大切なことです。この側面を生活行動の教育を通してまさに「イマージョン」していることに非常に感銘を受けました。

今回ご紹介した言語保持活動は最も成功した例の一つで、どのような環境でもすぐに実行可能なケースではないかと思われますが、言語の多様性を享受する態度を育むきっかけとしてご参考になればと思います。蛇足ながら、本稿のタイトルは筆者が大学生のころに読んで研究者を志すきっかけとなった 1 冊です。今回参加した学会や学校見学の間に何度も何度もこのフレーズが頭をよぎりました。それと同時に、ことばにこめられる社会文化的な背景についても深い洞察力をもてる教員養成に一層励まねば、という思いを強くしました。

書籍紹介

『金ソンセンニム－済州島を愛し、民族教育に生きた在日一世』

イルムの会（編）（2011）新幹社 2,100 円

本書で自らのこれまでを語る金容海氏は、本学からほど遠くない場所にある大阪市立北鶴橋小学校で、大阪府で最初の民族講師として36年の長い間在日韓国・朝鮮人児童の教育に携わり、「北鶴橋小学校を卒業するのは一体誰なのか。本名の実態ある児童なのか、それとも通称名の虚像なのか。朝鮮人児童が朝鮮人として誇らしく勧めるよう」との思いから民族教育の根幹として「本名を名のる」取り組みを進めた。氏の人柄に心酔する大阪府立高校の某校長の口癖は「金先生は大阪の在日の歴史の最後の語り部」であるが、本書は氏を父として慕う人々が、教育を中心とした氏の幅広い活躍の歴史を記録に遺すため出版されたものである。本書の出版記念の会で参会者へのお礼の挨拶に立たれた氏は、自らの信念と生き方を力強い声で参会者に語りかけられたが、84歳の高齢にもかかわらぬその姿は Samuel Ulman の「Youth」の一節を彷彿とさせるものであった。

Youth is not a time of life; it is a state of mind;.. it is a matter of the will, a quality of the imagination, a vigor of the emotions; it is the freshness of the deep springs of life....

大阪府における在日韓国・朝鮮人教育の歴史に触れる貴重な一冊である。　（中垣　芳隆）

編集後記・第 10 回勉強会（案内）

イタリアの名門サッカークラブ、インテル・ミラノに所属する長友佑都の「目指す場所がどんなに遠く離れていても這い上がっていくしかない。レベルの高い環境に身を置いているのだから、ギャップを感じるのは当然だ」という言葉に惹かれた。教育者は常に高いところをめざしていかなければならない。未だに困難な生活を強いられておられる東日本の被災者の人々に思いを馳せて。（ひ）

第 10 回勉強会予定

平成 23 年 7 月 16 日（土）

大阪府立阿倍野高校の喜多千穂先生に、これまで出会った生徒にどう向き合い授業を実践してこられたかを、個別の指導法や一授業の流れに特化した発表ではなく、28 年という先生の英語教員生活において、初任者の頃や中堅の頃の授業で折々考えられた工夫や苦労などとともにお話し願い、一過的でも持続的でもある「明日への英語授業」を模索する英語教師の進むべき道を探る。

大阪女学院大学・大阪女学院短期大学
教員養成センター Teacher-training Center
540-0004　大阪市中央区玉造 2 丁目 26 番 54 号
Tel: 06-6761- 9371　Fax: 06-6761-9373
Homepage: http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc
e-mail: ttc@wilmina.ac.jp